



Title	古墳時代後期の乙訓地域における埴輪生産の一様相
Author(s)	山口, 等悟
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 451-460
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代後期の乙訓地域における埴輪生産の一様相

山 口 等 悟

はじめに

乙訓地域は山城盆地の一部として桂川右岸に広がる地域であり、古墳時代を通じて多くの古墳が築かれてきた。古墳時代後期においても多くの古墳で埴輪が採用され、これらについての編年や生産体制の研究事例が積み重ねられてきた。近年では、原田昌浩が物集女車塚古墳出土埴輪の分析を中心に古墳間での工人移動の様相を炙り出している（原田 2017）。

本稿では、昨今の調査成果も踏まえたうえで、地域内外との交流という観点から古墳時代後期の乙訓地域における生産体制を考察する。

1. 乙訓地域の出土埴輪の様相

乙訓地域は山城地域のうち桂川右岸域に位置する地域であり、古墳時代前期以降、向日丘陵を中心に乙訓古墳群が展開する（図 1）。乙訓古墳群のうち古墳時代後期に位置づけられ調査などが進む古墳としては、物集女車塚古墳、芝 1 号墳、井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳、舞塚 1 号墳、塚本古墳などがあげられ、このうち井ノ内稲荷塚古墳を除いて埴輪が採用される⁽¹⁾。

物集女車塚古墳 向日市物集女車塚古墳は向日丘陵から東に伸びた段丘の先端部に位置する墳丘長 46m の前方後円墳である。埋葬施設は後円部に全長 11 m の右片袖式横穴式石室を有し、二上山白石の組合式家形石棺を石室主軸と直交に安置する。石室内からは玉類などの装身具、倭系装飾太刀、振り環頭太刀などの武器・武具

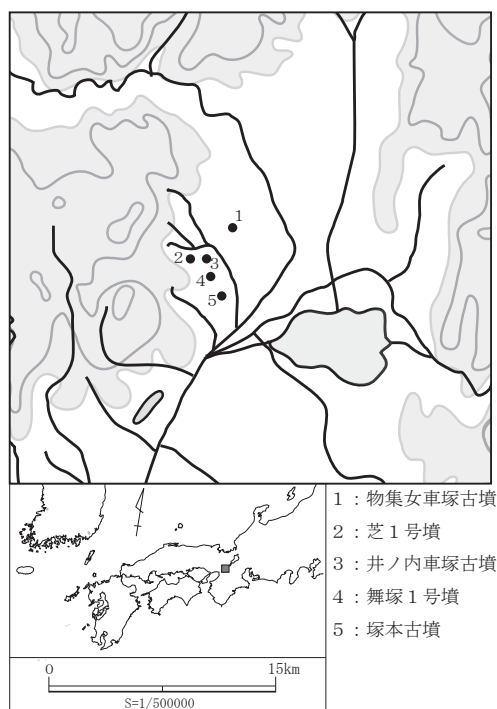


図 1 乙訓地域の後期埴輪出土遺跡分布

類、鉄製および金銅装の馬具といった副葬品が豊富に出土しており、石室構造、副葬品、埴輪の様相がそろそろ貴重な事例といえる。また、出土須恵器から MT85 型式期の築造時期が判断される（秋山・山中編 1988）。

埴輪は墳丘上のうち、墳頂とテラス部、造出しに確認される。円筒埴輪のほか、蓋形埴輪や石見型埴輪ないし盾形埴輪と思しき破片も存在する。円筒埴輪はほぼ破片資料であるが 4 条 5 段構成に復元され、2、4 段目に円形スカシ孔を千鳥状に配するスカシ孔配置（以下、スカシ孔非隣接段タイプ（木村 2019）と呼称）を採る。外面は一次調整のナナメハケ、内面にはナデを施し、最下段突帯を断続ナデ技法 B で成形する（図 2-1）。底部調整にはハケメ工具を用いて押圧を行っている。また、これらの円筒埴輪は、底部から口縁部まで粘土紐を一気に積み上げる畿内 V 群埴輪に一般的な一括成形を用いず、粘土紐積み上げ単位を 4 回繰り返す成形技法が採用されている（原田 2017）。

さて、物集女車塚古墳で主体を占める断続ナデ技法 B を採用する一群に対し、回転ヨコハケやタタキを施す破片も少数ながら確認されている（東影 2006・2008：図 2-2）。尾張系埴輪の特徴を有する一群と思われるが、全体の形状も定かではないため、尾張地域のものとどれほど共通するかは不明である。形象埴輪も破片資料のみであるが、蓋形埴輪の形状や半裁竹簡による沈線の存在などから²⁾尾張地域の製作技法は看取できず、畿内の工人が製作したものといえる（図 2-3・4）。すなわち、物集女車塚古墳では断続ナデ技法 B を用いる円筒埴輪工人集団とそれに関連する形象埴輪工人が主体的に製作にあたり、尾張系の円筒埴輪がごく客体的に供給される状況が読み取れる。

芝 1 号墳 芝 1 号墳は、京都市西京区から長岡京市にかけて分布する芝古墳群を構成する一基であり、古墳群唯一の前方後円墳である。墳丘長は 32 m で、後円部中央に右片袖式横穴式石

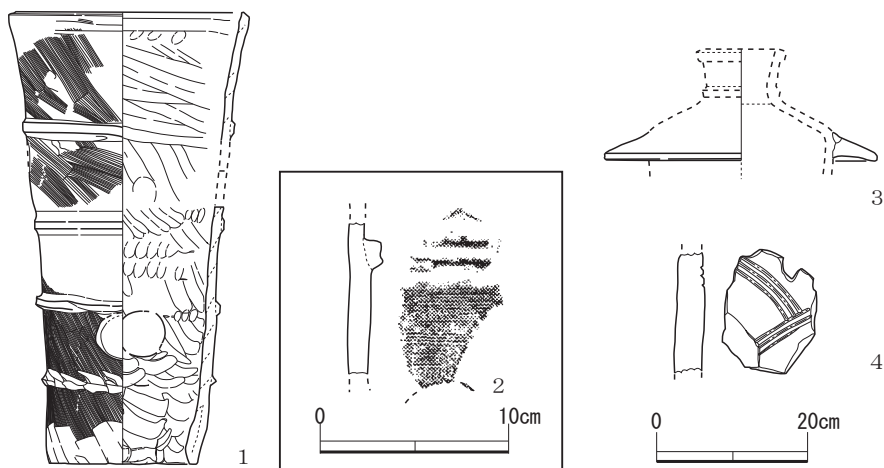


図 2 物集女車塚古墳出土埴輪

室を有する。石室形態や出土須恵器から MT15 型式期に比定され、乙訓地域において最古級の横穴式石室墳として位置づけられる（熊井 2018）。

出土埴輪は、墳丘上や周溝から検出されているほか、石室羨道の南東側に位置する墓道で原位置を保って確認されている。大半は円筒埴輪からなり、胎土はやや粗く、全形が確認できるものから 4 条 5 段構成で円形スカシ孔を 2・3・4 段目に千鳥状に穿つスカシ孔配置（以下、スカシ孔隣接段タイプ（木村理 2019）と呼称）に復元される。いずれも外面調整にナナメハケ、突帯成形に断続ナデ技法 A を採用する点で共通するが、ごくわずかに体部外面にヨコハケを施す個体も散見される。芝 1 号墳の円筒埴輪で注目すべきは、右上がりに施されるナナメハケが多くみられる点、口縁部に U 字状の割り込みを穿孔する個体がわずかに確認できる点である（図 3）。前者の右上がりのナナメハケは、器面を時計回りに回しながら左手でハケメ工具を使用していたことを示しており、左利きの工人が芝 1 号墳の工人集団に編成されていた可能性が高い。底部調整は内外面にケズリを行うもの、内面のみにケズリを施すもの、調整を行わないものに分類できるが、ケズリを行う個体が過半数を占める。

形象埴輪と思しき破片はわずかであるため判別が困難であるが、円筒基部とみられる破片が確認されている。ユビオサエによる貼付押圧突帯を有し、東影の分類における 2 類型（東影 2010）の基部倒立技法を採用している可能性のある個体である⁽³⁾。

井ノ内車塚古墳 長岡京市井ノ内車塚古墳は、芝 1 号墳、井ノ内稲荷塚古墳と指呼の距離に位置する全長約 39 m の前方後円墳である。後世の攪乱によって大きく情報が失われているものの、近年の調査において右片袖式と思しき横穴式石室が検出されている。出土須恵器などから TK10 型式期に位置づけられ、芝 1 号墳にわずかに後出するとみられる（中島ほか 2021）。

埴輪は、前方部東側裾部および造出し周辺の周溝埋土から出土しており、特に造出し周辺では円筒埴輪のほか、石見型、家、蓋、靱、人物、動物など多様な器種の形象埴輪が確認される。円筒埴輪はいずれも 3 条 4 段構成で 2・3 段目に互い違いにスカシ孔を穿孔するものであり、外面ナナメハケ、断続ナデ技法 A による突帯成形も共通してみられる。底部調整に板押圧をお

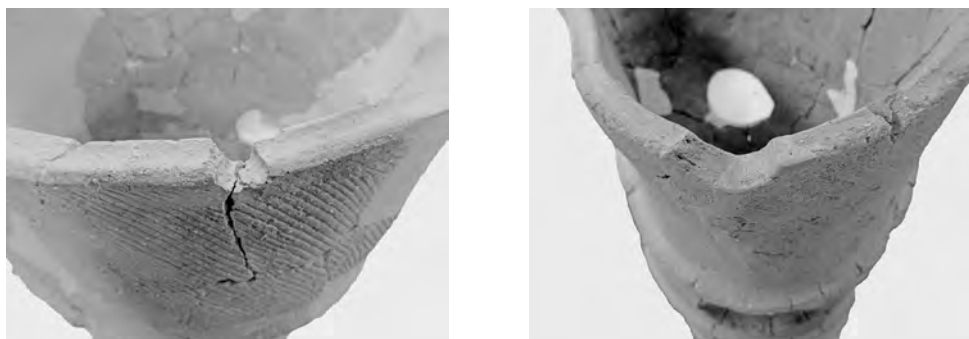


図 3 円筒埴輪口縁部における U 字状割り込み（左：芝 1 号墳、右：井ノ内車塚古墳）

こなう個体もみられるものの、底部が面をもち、顕著には施されない一群が主体的に看取できる。さらに、当古墳の円筒埴輪においても右上がりのナナメハケによる外面調整や、U字状の割り込みをもつ口縁部を認めることができ、前述の芝1号墳の出土埴輪と高い共通性をもつことを想定できよう。また、「△」や「◇」字のヘラ記号も確認される。

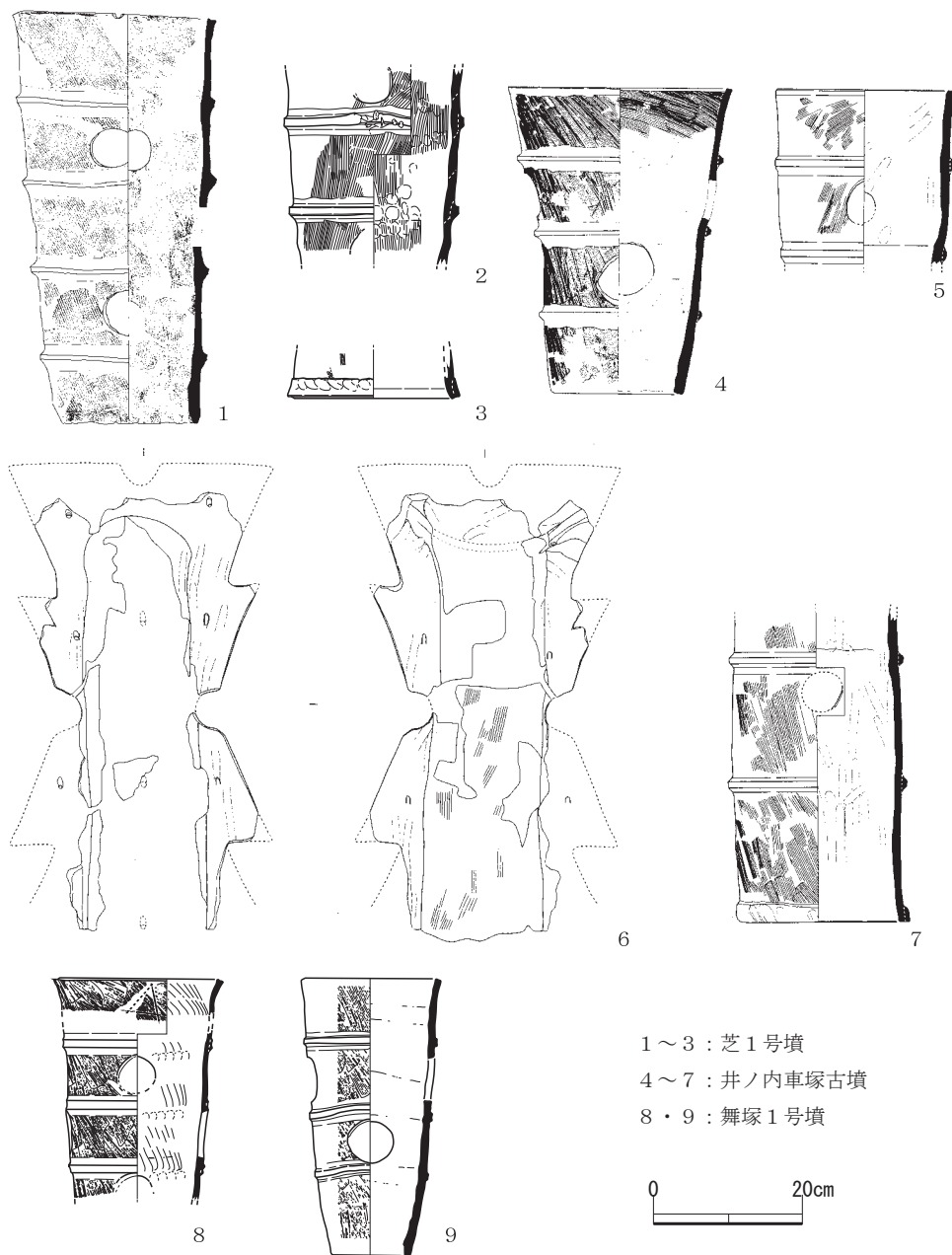


図4 乙訓地域の出土埴輪

続いて形象埴輪には豊富な器種組成が確認できるが、このうち製作技法等が詳細に見て取れるのは、家形埴輪と石見型埴輪であろう。井ノ内車塚古墳の家形埴輪は入母屋造のもので、壁体部と下屋根を一括成形で、下屋根と上屋根を分割焼成でそれぞれ製作する⁽⁴⁾。石見型埴輪は3個体が確認されるが、いずれも文様をもたない無分割型（和田 2006）であり⁽⁵⁾、円筒部の上辺に支持粘土帯を接合して形象部上部と円筒部を補強している。また、石見型埴輪に伴うとみられる円筒基部は2条以上の突帯で底部に貼付押圧突帯を有する2bタイプの倒立技法であることが指摘できる。

舞塚1号墳 長岡京市舞塚1号墳は低位段丘上に立地する墳丘長39mの帆立貝形前方後円墳である。墳丘は完全に削平を受けており、埋葬施設等は不明である。出土須恵器からTK47型式期の築造時期が想定される（山本 1991）。

円筒埴輪および人物埴輪が周溝内より出土している。円筒埴輪は3条4段に復元できるものと、4条5段以上になる可能性のあるものがあり、うち4条5段のものは隣接段タイプのスカシ孔配置を採る。外面調整はナナメハケ、内面調整はナデが主体で、断続ナデ技法Aによる突帯成形を採用するが、底部調整は観察できない。また、口縁部に「△」のヘラ記号を持つ個体が数点存在する。

塚本古墳 長岡京塚本古墳は小畑川に形成される緩扇状地状に立地する墳丘長約30mの前方後円墳である。長岡京の造営時に墳丘が削平され周溝も埋没しており、埋葬施設も不明である（木村 泰 2010 ほか）。

周溝内からは埴輪、須恵器類が出土している。埴輪は円筒埴輪のほか、家、石見型、蓋、剣、動物など豊富な器種からなる（図5）。円筒埴輪は4条5段構成、隣接段スカシ孔配置で外面にはタテハケ調整を採り、突帯はいずれも断続ナデ技法Aによって成形する。内面調整は口縁部付近をハケで調整する。底部調整は板状工具によるナデや押圧を主体とし、底面を調整せず顕著ではない。他方、少数ながら内面にケズリを採用する個体も存在する。口縁部には「×」、「△」、「◇」といったヘラ記号が確認される。また、わずかに

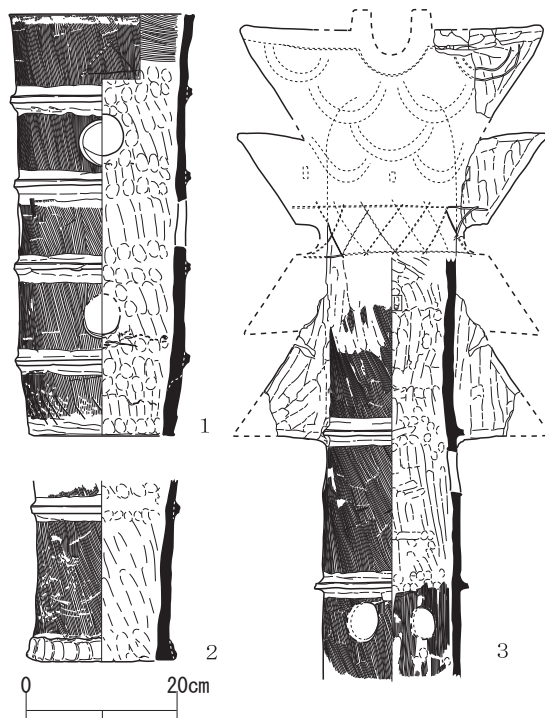


図5 塚本古墳出土埴輪

右上がりのナナメハケによる外面調整も認められ、芝1号墳や井ノ内車塚古墳と同様に左利き工人在生産にあたっていた可能性も指摘できる。

さて、塚本古墳の形象埴輪のうち全形が把握できるものは家形埴輪、石見型埴輪、蓋形埴輪である⁽⁶⁾。家形埴輪は、3条の突帯を有し、壁体部と屋根を一体で成形する大型の寄棟造のもので、宇治市菟道門ノ前古墳例とよく似た形態であることが指摘される（東影 2018）。石見型埴輪は複数個体が存在し、それぞれ文様もやや異なるが、いずれも中央分割帯に線刻の入る2分割型であり上辺に粘土帯を付加する点、円筒部の口縁部に粘土帯での補強を行わない点が共通する。また、蓋形埴輪は粘土板接合タイプで切り込みの入ったU字形の頂部が2つ横並びになる飾り板を有し、小栗明彦の分類におけるⅧc類に相当する（小栗 2007）。

2. 乙訓地域における円筒埴輪生産と系統

以上、乙訓地域における各古墳の埴輪の様相を述べてきた。特に円筒埴輪からは、断続ナデ技法Bを採用する一群を主体とする物集女車塚古墳と、断続ナデ技法Bを採用せず底部ケズリ、ないし底部調整を明確に施さない一群からなるその他というように大きく二分することができる。とりわけ、後者のうち芝1号墳、井ノ内車塚古墳、塚本古墳では右上がりのハケを施す左利きの工人による製作が認められ、さらに芝1号墳、井ノ内車塚古墳の両者では口縁部にU字状の削り込みがみられる点⁽⁷⁾が共通する。古墳間でハケメパターンの一致は確認できなかったものの、これらの技法の共通性は同一の工人集団による製作を反映したものと理解できる。

しかしながら、古墳ごとの製作技法を比較すると、その割合には差異がみられる。破片数から底部調整の割合を分析したところ、芝1号墳では板押圧が5%、ケズリが72%（うち内面ケズリのみでは28%）、無調整のものが22%と、ケズリが卓越するのに対し、塚本古墳では板押圧59%、ケズリ9%、無調整32%であり、井ノ内車塚古墳では板押圧43%、無調整57%と、後二者ではケズリを採用する個体が僅少で、板押圧と無調整が半数ずつ存在した（図6）。また、外面に右上がりのハケを施す個体の割合をみると、芝1号墳では77%と主体を占める一方で、

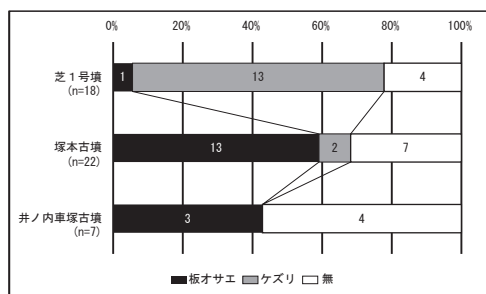


図6 長岡地域の円筒埴輪底部調整

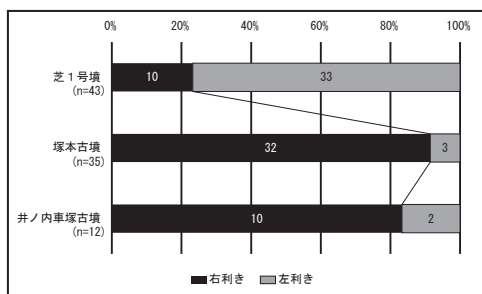


図7 長岡地域の円筒埴輪外面調整方向

塚本古墳では9%、井ノ内車塚古墳では17%とその割合は低い（図7）。

さて、村瀬陸はMT15～TK10型式期において、時期が下るにつれ底部ケズリの割合が減少していくことを指摘している（村瀬2018）。芝1号墳ではMT15型式期、井ノ内車塚古墳ではTK10型式期の須恵器が出土していることを踏まえると、底部ケズリが卓越する芝1号墳から、ケズリが減少し板押圧や無調整の底部が増加する塚本古墳、井ノ内車塚古墳という築造順序を表象している可能性が高いのである。なお、後二者でも底部ケズリがわずかに残り、板押圧がやや意識される塚本古墳が先行する可能性がある。

このようにみたとき、左上がりのハケを施す個体の増加は、塚本古墳と井ノ内車塚古墳において右利きの工人が時期を新たにして工人集団に編成されていることを示す。原田昌浩は、左上がりのナナメハケの円筒埴輪が天鼓の森古墳や桂川をはさんだ嵯峨野地域に位置する天塚古墳にもみられることから、山城地域において工人が移動しながら古墳の近隣で生産を行っていたと理解する（原田2017）。ただし、芝1号墳と井ノ内車塚古墳の円筒埴輪の胎土が類似することからしても、少なくとも長岡の小地域における円筒埴輪生産体制は、築造のたびに部分的に異なる技法をもつ右利き工人が組み込まれ、集団内で製作技法が漸次的に変化していく一系統による継続的な体制が想定できるのである。このことは芝1号墳の右上がりのナナメハケ個体の底部がいずれもケズリ調整であったこととも整合的といえるだろう。

他方、物集女車塚古墳の円筒埴輪はこれらの工人集団と全く系譜を異にする。築造時期がやや後出する点を踏まえると、物集女車塚古墳の円筒埴輪は地域内の工人集団を引き継がず、築造に際して他地域との交流のもと新たに工人集団を編成した公算が大きい。断続ナデ技法Bを採用する円筒埴輪は古市古墳群や大和盆地東部、三島地域の古墳に認められ、尾張系の円筒埴輪は畿内においては淀川流域に展開することから、いずれかからの系譜をたどることができよう。

3. 乙訓地域における形象埴輪生産と系統

乙訓地域のうち、形象埴輪の組成が明らかなものとしては塚本古墳と井ノ内車塚古墳があげられるが、塚本古墳では寄棟造の家形埴輪や粘土付加を行う2分割型の石見型埴輪からなるのに対し、井ノ内車塚古墳では入母屋造の家形埴輪や無文の石見型埴輪を採用する。芝1号墳では形象埴輪がほとんど見いだせないことを合わせると、同一系統の工人が継続して生産に携わる円筒埴輪と、築造ごとに異なる工人が組織される形象埴輪、という二層をもつ埴輪生産体制がとられていた可能性が指摘できる（図8）。ただし、塚本古墳と井ノ内車塚古墳の形象埴輪はともに2類型の基部倒立技法を共有することなどから、菅原東遺跡のような同一の地域内の生産地から工人が導入されている可能性も付しておきたい。

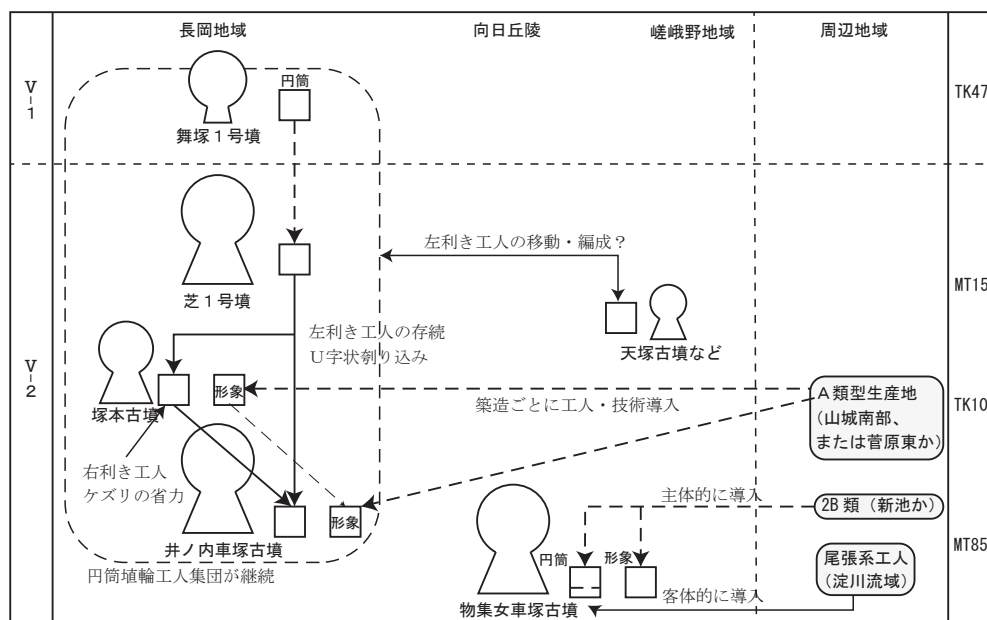


図8 乙訓地域における埴輪生産体制模式図

おわりに

本稿では、乙訓地域における古墳時代後期の埴輪生産体制について考察を行った。特に円筒埴輪の技法に注目し、地域内で異なる工人集団が活動していたことが明らかとなった。物集女車塚古墳のように、他地域との交流を通じて新たな工人集団が編成される一方、芝1号墳や井ノ内車塚古墳、塚本古墳では、同一の工人集団が継続的に技法を変化させながら円筒埴輪を製作していたことが確認された。このような技法の変遷は、古墳間の交流や工人移動の影響を反映しており、乙訓地域の生産体制の多様性と連続性を示している。今後、さらに南山城地域などの周辺地域間の比較研究を進めることで、古墳時代の埴輪生産における工人集団の動態をより深く理解することが求められる。

謝 辞

本稿の作成にあたって、福永伸哉教授、高橋照彦教授、上田直弥助教から懇切丁寧なご指導を賜るとともに、大阪大学考古学研究室の諸学兄より多くのご助言をいただきました。

以下の各氏よりご教示ならびにご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

鐘方正樹、木村理、柴原聡一郎、中島皆夫、西森正晃、原田昌浩、東影悠、和田一之輔（敬称略・五十音順）

また、資料調査、資料掲載に際して、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、長岡京市埋蔵文化財センターより格別のご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

- (1) 本稿では田辺昭三による須恵器編年(田辺 1981) および、それを修正した山田邦和による編年(山田 2011)を用いる。TK23・47 型式期を古墳時代中期末とし、MT15 型式期以降を古墳時代後期とする。しかし、TK23・47 型式期は断続ナデ技法による突帯製作と底部調整が盛行し始めるV群円筒埴輪の出現期にあたり、MT15 型式期以降の資料と明確には区別できないことも踏まえ、当該時期の資料も対象に含める。
- (2) 半裁竹簡を用いた形象埴輪の施文は新池遺跡や今城塚古墳、和歌山県井辺八幡山古墳などにみられることから、物集女車塚古墳の形象埴輪もこれら地域の影響をもつ一群に含まれる可能性がある。
- (3) この個体は円筒埴輪の貼付押圧口縁である可能性もあり、位置づけには慎重を期すべきであろう。
- (4) 井ノ内車塚古墳出土家形埴輪の下屋根部は平坦面に粘土帯を有し、ソケットB類(青柳 2014)に分類される可能性がある。また、壁体部と下屋根の接合部は付加粘土塊によって補強されており、特徴的な製作技法である。
- (5) 井ノ内車塚古墳の無分割型の石見型埴輪のうち、一点のみ形象部の中央を分割するように簡素な沈線の入る個体が存在する。これは中央分割帯によって形象部を二分する2分割型を意図した線刻であり、2分割型と無文の無分割型との系統的つながりを示す可能性があるが、類例に乏しく即断は避けたい。
- (6) このほか、塚本古墳の剣形埴輪は和田一之輔の検討に詳しい。和田は当例を上方が開放し割り込みをもつ把頭、突帯を2条貼り付ける把縁を特徴とする剣形4a類に分類しており、奈良県の勢野茶臼山古墳、荒蒔古墳と共通性をもつ類型であるとする(和田 2019)。
- (7) U字状の割り込みは口縁部のうち一か所に穿孔され、スカシ孔と同様刀子によって整形されたものである。また、乙訓地域以外でも奈良県北花内大塚古墳や市尾墓山古墳など、大和盆地南部の大型前方後円墳にも類例がみられる。複数地域の前方後円墳にみられる点から、広域な地域間交流とのかかわりのなかでこの技法をとらえる見解(内藤 2018)もあるが、北花内大塚古墳、市尾墓山古墳ではともに断続ナデ技法Bを採用する埴輪が卓越する点で、乙訓地域の事例との共通性が見出しにくく、筆者は近接する類似した円筒埴輪を採用する古墳間で認められるということを強調したい。

引用・参考文献

- 青柳泰介 2014「古墳時代後期の家形埴輪にみられる二者」『郵政考古紀要』第59号 大阪郵政考古学会、大阪：pp. 76-90
- 秋山浩三・山中 章(編) 1988『物集女車塚』向日市教育委員会、京都

- 梅本康広 2011「物集女車塚古墳第4次（4PDANJ-4 地区）～後円部、前方部、北くびれ部、南造出～発掘調査報告」『長岡京跡内裏「東宮」内郭後宮・野田遺跡・物集女車塚古墳』向日市埋蔵文化財センター、京都
- 小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考』Ⅰ 大阪大谷大学博物館、大阪：pp. 153-226
- 木村 理 2019「百舌鳥古墳群における埴輪生産の展開—窖窯焼成導入以降を中心として—」『古代学研究』220 古代学研究会、大阪：pp. 13-29
- 木村泰彦（編）2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第54集 長岡京市埋蔵文化財センター、京都
- 熊井亮介 2018『芝古墳（芝1号墳）調査総括報告書～乙訓における後期首長墓の調査～』京都市文化市民局、京都
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店、東京
- 内藤元太 2018「大和南部地域を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第8号 埴輪検討会、奈良：pp. 159-171
- 中島皆夫 2021『国史跡 乙訓古墳群 井ノ内車塚古墳の調査～遺構編～』長岡京市教育委員会、京都
- 中島皆夫 2024『国史跡 乙訓古墳群 井ノ内車塚古墳の調査～遺物編～』長岡京市教育委員会、京都
- 原田昌浩 2017「山城盆地北部における古墳時代後期の埴輪生産」『埴輪論叢』第7号 埴輪検討会、奈良：pp. 149-166
- 東影 悠 2006「近畿地方における尾張型埴輪の様相」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会、兵庫
- 東影 悠 2008「尾張系埴輪の製作技術と生産体制」『橿原考古学研究所論集』第十五 橿原考古学研究所、奈良：pp. 307-326
- 東影 悠 2010「形象埴輪の製作技法—形象基部倒立技法の研究—」『待兼山考古学論集—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』Ⅱ 大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 539-556
- 東影 悠 2018「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』第271号 大阪歴史学会、大阪：pp. 26-53
- 村瀬 陸 2018「大和北部地域を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第8号 埴輪検討会、奈良：pp. 149-158
- 山本輝雄 1991「舞塚古墳群」『長岡京市史』資料編一 長岡京市史編さん委員会、京都
- 山田邦和 2011「須恵器の編年①西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1 同成社、東京：pp. 146-159
- 和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第53巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 69-89
- 和田一之輔 2019「埴輪の大刀と剣」『考古学雑誌』第102巻第1号 日本考古学会、東京：pp. 46-